

NEWS LETTER

一般財団法人ゆうちょ財団
国際ボランティア支援事業部

体の部位に関する英語を学ぶ子ども(写真1)

特定非営利活動法人 パレスチナ子どものキャンペーン 田浦久美子さんにお話を伺いました！

レバノンには70年以上前から多くのパレスチナ難民が暮らしており、2011年のシリア内戦以降、シリアからの難民も受け入れています。2024年現在、約20万人のレバノン生まれのパレスチナ難民と、約85万人のシリア難民、また約2万8千人のシリアから避難してきたパレスチナ難民が生活し、国の人口の5人に1人が難民という世界でも大変な状況が続いています。パレスチナ難民の多くは難民キャンプ(写真2)やその周辺に暮らしていますが、市民権がなく土地の所有は認められていません。厳しい就労制限があるため、低賃金の日雇いや季節労働者が多く、国連やNGOの支援に頼らざるを得ない生活を続けています。また、シリア難民のための難民キャンプは認められておらず、多くの難民がテントやガレージ、非公式の難民キャンプやパレスチナ難民キャンプで暮らしています。特定非営利活動法人パレスチナ子どものキャンペーンは、パレスチナ難民キャンプで暮らす子どもたちやその家族とコミュニティに対し、教育・保健・福祉・心理・経済面でさまざまな支援を行っています。

ゆうちょ財団は、2022年度と2023年度に同団体がレバノンで実施している活動に対し助成を行っています。この活動では、首都ベイルートにある2ヶ所の難民キャンプで暮らす小学校1~3年生のパレスチナ難民、シリア難民の子どもを対象に、学習支援クラスを開講し、学習に困難を抱える子どもたちをサポートしています。また、子どもや家族向けの心理社会的サポートもしています。



難民キャンプの外観(写真2)

ー レバノンの活動を始めたきっかけを教えてください。

田浦さん：

特定非営利活動法人パレスチナ子どものキャンペーンは1986年に設立されました。この当時、レバノンは内戦状態にありました。レバノンにあるパレスチナ難民キャンプでは虐殺が起こり、人々は飢えに苦しんでました。その際に、日本から食糧や衣類、靴などの購入資金を集めるキャンペーンを行ったのが、当団体の活動のスタートです。そのような経緯から、団体名に「キャンペーン」がついています。その後、レバノンの北部にある難民キャンプの中に子どもたちのためのセンターを建設したり、子どもの歯科支援などの活動を経て、2000年にレバノンにおける学習支援クラスの活動を開始しました。

ー 難民キャンプで暮らす人びとの現状について教えてください。

田浦さん：

レバノンのパレスチナ難民キャンプでは、これまで度重なる戦火や、虐殺事件もあり、現在もお電気や水道といったインフラが整備されていない状況です(写真3)。また、狭いキャンプの中でどんどん人口が増える中、建物を上に上に増築していった結果、日光がなかなか当たらない住居環境となってしまうなど(写真4)多くの問題を抱えています。その中で、パレスチナ難民、シリア難民が多く生活しています。レバノンで生活しているパレスチナ難民は、市民権をレバノン人のようには持つことができず、教育や保健にアクセスするのが難しく、貧困に陥っています。また、難民であるがゆえの差別を受けたり、あるいは厳しい就労条件が課されており、非常に過酷な生活を強いられています。

そうした中、2019年以降レバノン全体で経済や財政危機が続いています。現地通貨の価値が98%以上暴落し、レバノンでは物資をほとんど輸入に頼っているため、食料品、医薬品、エネルギーの価格が高騰し、多くの物資が不足する状況が続いています。加えて、新型コロナウイルスの感染拡大や首都ベイルートの港湾で大きな爆発事故が起こり、色々な危機が重なっている状況の中、もともと大変な生活をしてきたパレスチナ難民の方々が、この複合的な危機の中で一層の生活苦に陥っています。

そうした中で、持っているものを売却したり、食事の回数や量を減らし、あるいはもう返せないことを分かった上で、どこからか借金をするといった、生きていくための本当に厳しい選択を取らざるを得ない状況です。



電線と配水管が絡み合う
難民キャンプ内の通り(写真3)



かろうじて日光が届く
場所で物干し(写真4)

－ 難民キャンプの子どもたちの教育環境はどのような状況でしょうか。

田浦さん：

コロナ禍や2019年秋から続く経済危機による教員のストライキで、2019年から現在まで学校が頻繁に閉鎖され、レバノンの教育システムそのものが危機的状況に陥っています。子どもたちはコロナ禍で、2学年近くもの間、長期休校や不十分な環境での自宅学習を余儀なくされた結果、学習能力、身体機能、コミュニケーション力といったスキルの低下が顕著に見られます。

また、パレスチナ難民の子どもたちが通う国連の学校では、資金不足を理由に学校の統廃合やクラスが減らされる状況が続き、現在、ひとクラスあたりの子どもが50人以上いるようなクラスもあると聞いています。シリア難民の子どもたちは通常公立学校に通っています。しかし、レバノン人の子どもたちが、経済状況の悪化により元々通っていた私立学校の授業料が払えないために公立学校に転入してきて、それにより、シリア難民の子どもが公立学校から半ば追い出される、押し出されるような形で退学を余儀なくされる、あるいは入学ができないといった事例も報告されています。パレスチナ難民、シリア難民ともに子どもたちの教育状況は、非常に悪化している状況です。

－ 子どもたちへの学習支援では具体的にどのようなことを実施していますか。

田浦さん：

子どもたちが学校で習う基礎教科のアラビア語、英語、算数に関して、学校での学習内容の復習や補助をしています。先ほど申し上げましたとおり、レバノンでは教育システムそのものが危機的状況に陥っていて、学校での授業の日数などの時間数の確保も問題になっています。また、子どもたち一人一人の学習進度や理解状況も違うため、学習支援クラスでは、だいたい15人程の少ない人数で指導員がそれぞれの子どもたちのレベルに合わせた課題や、独自のワークブックを準備し、アルファベットや数字を理解するためにブロックを用いた学習を取り入れるなど、工夫して指導を進めています(写真5)。また、指導員が子どもたちにこうした学習の補助を行うだけでなく、ソーシャルワーカーとも連携をしながら、子どもたちの家族との面談やフォローも行っています。その他、夏休みなどの休み期間を利用して学校通学期間の中の復習を行うほか、心理社会的サポートを目的としたイベントやワークショップも実施して、絵を描いたり、難民キャンプを出て遠足や屋外の公園でスポーツも実施しています(写真6)。



英語のゲームをする児童と指導員
(写真5)



難民キャンプ外の公園でボールを使ったスポーツを楽しむ子どもたち(写真6)

ー 心理社会的サポートの必要性、また、ピアサポートのメリットはどんなところにありますか。(ピアサポート: 同じような立場や課題に直面する人がお互いに支え合うこと)

田浦さん:

レバノンの社会経済状況が悪化する中で、もともと大変な生活を余儀なくされていて、特に難民の家族への影響というのは非常に大きいです。そうした中、子どもたちへの教育支援だけではなく、家族を含めたもう少し包括的な支援の必要性が高まっています。例えば、その生活に余裕がなくなってしまう中で、ストレスを抱えたり、周囲に悩みを相談できずに抱え込んでしまったりする保護者の方もいます。残念ながら私たちが支援している子どもたちの中にも、例えば保護者からネグレクトを受けている子ども、あるいは学校で教師から体罰を受けたことがある子どもがいるというケースをソーシャルワーカーなどから聞くことがあります。このようなケースの場合、ソーシャルワーカーが個別に面談をして保護者に働きかけたり(写真7)、必要に応じて精神科医師や臨床心理士といった心理の専門家による支援につないでいます。

さらに、人びとのメンタルヘルスの状態が悪化することを防止し、今後予防していくため、住民同士で助け合うピアサポートの体制を広げていくことが必要と考えています。特にコロナ禍の時に、外部からの支援が制限されたり、支援を必要としている人びとが見えにくくなっていたので、コミュニティに根差した心理社会的サポート、ピアサポートの必要性は高いと考えています。



ソーシャルワーカー(右)と母親の個別面談(写真7)

ー レバノンでの活動において、これまでで一番苦労したことはどのようなことでしょうか。

田浦さん:

私自身は2016年からこのレバノンの活動に携わっていますが、2019年の秋以降、レバノン全体で経済状況が悪化し、その後コロナ禍やベイルートの港湾で爆発事故が起こるなど、いくつものことが重なって、レバノン全体の本当に危機的な状況が今なお続いています。その中で、子どもたちが2年近くもの間在宅での学習を余儀なくされました。レバノンは電力不足で、難民キャンプの中ではほとんど電気が来ません。例えば学校からタブレットが支給されても、タブレットをインターネットに繋いで使うには電気が必要なため使えないといったような不十分な環境の中で、どういう風に学習支援を届けていくか非常に苦労しました。

在宅での学習支援を実施していた期間中は、指導員がワークシートとか補助教材のビデオや音声のデータを保護者を通して共有し、学校の宿題のサポートを行っていました。また、指導員やそのアシスタントが日常的にずっと保護者や子どもと連絡を取りながら、子どもたちの学習状況を確認し、電話とかビデオ通話を通じて、子どもたちへ直接解説していました。ロックダウンが解除された後、学習支援クラスを少人数でスタートしましたが、2年近くというあまりにも長い期間に本来通学でサポートできたことが、リモートでは十分に届けられなかったため、学習能力の低下、特にコミュニケーション力の低下が大きく、そのあたりをフォローすることに非常に苦労しました。

— 最後に、今後の展望について教えてください。

田浦さん：

学習支援では引き続き子どもたち一人一人の理解度に応じた教材を用いた、段階を踏んだ指導、またこうした状況の中でも、子どもたちが自分に自信を持ち学習に対してやる気を持つことができるよう支援を行っていきたいと考えています。その結果、子どもたちの学習意欲が向上していくことを目指すとともに、現在支援している低学年の1年生から3年生の子どもたちの基礎学力の定着に努めてきたいと考えています。この学習支援クラスは、子どもたちが学習を行い私たちがそれを補助する場所であるだけでなく、子どもたちが安心して過ごせる居場所のようなところになることで、社会の未来・将来を担う子どもたちの心と体の発達を支えていきたいと思っています。

ソーシャルワーカーによる心理社会的サポートも行っていますが、子どもたちの現在や将来に対して不安を抱えている、心配をしている保護者が非常に多いので、子どもたちへの直接の支援だけでなく、保護者との面談やサポートを行うことによって、そういった不安とか心配をできる限り緩和していきたいと思っています。レバノンの難民の方々を取巻く環境が非常に厳しい今、子どもたちや家族が希望を捨てずに、子どもたちが将来自立した生活を送れるよう、少しでも光を当てて生きる力を身につけるサポートを今後も行っていきます。

—田浦さん、ありがとうございました。—

TOPIC 1

2024年度NGO海外援助活動助成団体を決定しました

2024年度の申請では合計18団体より応募をいただきました。

このたび、10団体の助成を決定しました。助成団体は、次のとおりです。

No.	団体名	活動国	活動名	助成予定額 (円)
1	特定非営利活動法人 ASHA	ネパール	地方医療における医療情報管理を通じた医療の質向上支援	1,000,000
2	特定非営利活動法人 イランの障害者を支援するミントの会	イラン	車いす障害者の印刷技能を活用した社会参加事業	1,000,000
3	国際NGO ViVID	ガーナ	「村おこし」2024 ～農業事業～	1,000,000
4	特定非営利活動法人 Support for Woman's Happiness	ラオス	少数民族と障がい女性を支える製品づくり：被服	1,000,000
5	NPO法人 DAREDEMO HERO	フィリピン	貧困層からのリーダー育成事業	1,000,000
6	特定非営利活動法人 地球の友と歩む会	インドネシア	住民の生活向上のためのライム栽培および販売基盤構築事業	1,000,000
7	ブルードット	フィリピン	貧困層に対する「小規模養豚」導入による副収入の確保と教育	1,000,000
8	NPO法人 You&Meファミリー	バングラデシュ	学校における貧困層生徒職業訓練と、それを持続可能な運営にするための収益化事業	859,088
9	特定非営利活動法人 Little Bees International	ケニア	循環型社会形成を目指したリサイクルバッグの製作による貧困層の女性と子どもたちのエンパワーメント事業（3年目）	1,000,000
10	特定非営利活動法人 LOOB JAPAN	フィリピン	資源循環社会の形成に向けたごみ処理場コミュニティのユースリーダー能力強化（第3期）	1,000,000

ワン・ワールド・フェスティバルに出展しました

2月3日(土)、4日(日)に行われました第31回ワン・ワールド・フェスティバルにブース出展をしました。

ワン・ワールド・フェスティバルは1993年から毎年開催している西日本最大の国際協力・交流のお祭りです。市民に広く国際協力の大切さを認識してもらい、活動に参加する機会を提供しようと、関西を中心に国際協力・交流に関わるNPO/NGO、政府機関、国際機関、教育機関、自治体、企業などが協力して開催しています。

ブースでは、ゆうちょ財団が行っているNGOへの助成について周知しました。また、2023年度助成している団体の活動写真を展示しました。

2日間ともに晴天に恵まれ、会場となった梅田スカイビルにはインバウンドのお客様も含めて多くの来場者が訪れました。



ゆうちょ財団のブース(写真8)



梅田スカイビル(写真9)

編集後記

今回は特定非営利活動法人 パレスチナ子どものキャンペーンの取組みを紹介するとともに、2024年度NGO海外援助活動助成団体の決定と、2月3日(土)、4日(日)に行われました第31回ワン・ワールド・フェスティバルへの出展についてレポートしました。ワン・ワールド・フェスティバルでは、NGOの皆様をはじめ多くの方がゆうちょ財団のブースに立ち寄ってくださいました。この場を借りてお礼申し上げます。